

《論 説》

留学生支援ネットワーク・ピーチの活動を振り返って（前）

一週末型ホームステイの実施を中心に

廣 田 陽 子・岡 益 巳*

1. はじめに

岡山大学は2012年度に文部科学省の「留学生交流拠点整備事業」に採択され、地域総合研究センターの主導の下に、いわゆる「留学生の街づくりプロジェクト」が推進中である。留学生と地域住民との交流促進を考える場合、その有効な手段の一つとしてホームステイを挙げることができる。廣田・岡(2008)では、「ホームステイは、留学生の日本文化・社会への理解を深めると共に、地域住民の国際化を促して、大学の地域貢献の一端を担うことにもつながる。(p.135)」と述べ、ホームステイの有効性を説いている。

岡山地域においては、2001年に筆者の一人である岡と大野三枝子氏（NPO：ハンド・イン・ハンド岡山会員）が中心となって、岡山のNGO 6団体とともに留学生の週末型ホームステイの受け皿となる「留学生支援ネットワーク・ピーチ」（以下、「NWピーチ」と略称する）を立ち上げた。2000年来日した複数の日本語研修生からホームステイを体験したいという要望が相次いだため¹、これらの要望に応えるべく、身元の確かなホストファミリーを早急に確保する必要に迫られた結果である。NWピーチは、岡山大学留学生センター留学生相談室と協力し、主として同センターに所属する、来日直後の国費留学生に対するホームステイの企画実施を活動目的として発足した。2001年度から2013年度にかけて毎年2回、通算26回のホームステイを企画実施し、これまでに60か国・地域出身の留学生443人が参加した。また、ホームステイを軸とした活動を企画実施するために、2013年末現在で通算70回のピーチ連絡会議を開催してきた。

なお、週末型ホームステイは、当初より留学生センター（現：グローバル・パートナーズ）で開講する「日本事情」科目の課外授業という位置づけであったため、当該科目を履修可能な在籍身分を持つ留学生のみがホームステイ参加資格を有する²。

* 岡山大学グローバル・パートナーズ特任教授

1 「日本語研修生」は大使館推薦国費研究留学生であり、当時、来日後半年間は留学生センターで大学院予備教育として集中的に日本語を学んだ後、大学院へ配属された。

2 2001年当時、留学生センター開講の「日本事情」科目の履修を許可されていたのは、国費留学生である日本語研修生、日韓理工系学部留学生事業で来日する予備教育学生（以下、「日韓予備教育学生」と略称する）及び日本語・日本文化研修留学生（以下、「日研生」と略称する）のみであった。

2. 先行研究及び本研究の目的

2.1 先行研究

ホームステイは、地域社会における国際交流の特徴的なパターンの一つである。そこで先ず、地域社会における国際交流の重要性や国際化促進のノウハウ等に関して論じた先行研究に目を向けると、内田（1994）、横田（1995, 1999）、佐々木（1997）、栖原（1999）、有川（2000）、古城（2002）、中山（2004）、有田（2005）、松元（2005）、花見（2006）、バージン（2007）、大西（2008）、廣田・岡（2008）、佐藤・橋本（2011）、佐藤（2012）などが挙げられる。大学が関与して留学生と地域社会との交流を深める際に注意すべき点や課題については、上述の先行研究のうちの7点を引用しつつすでに廣田・岡（2008:136-137）で指摘しており、本稿では重複を避けるため、大西（2008）に言及するに止める。大西（2008）は、「地域と留学生の出会いの場の創出の必要性、意義についての議論は近年非常に活発（p.85）」であるが、「豊富な実践を捉える理論的枠組みの構築が遅れている（p.85）」と問題提起した上で、普遍的なモデルの構築を試みており、地域社会における国際交流の問題を理論的に探求する際には必読の先行研究である。

次に、我が国の大学等に在籍する留学生のホームステイに関して論じた先行研究に着目すると、次のようなものが挙げられる。すなわち、ホストファミリーからみた留学生の異文化間コミュニケーションの問題を取り上げた手塚（1991）；ホストファミリーの異文化間コミュニケーションの構造を明らかにした山本（1994）；ホストマザーの対人意識を分析した山本（1996）；留学生とホストファミリー双方の適応課題を論じた佐々木・木村（1996）；長期ホームステイが日本語学習に及ぼす効果について言及した牧野（1996）、鹿浦・武田（2000）、鹿浦（2007, 2008）；ホームステイの際に留学生と日本人ホストとの間でどのようなソーシャルスキルが用いられているのかをKJ法を用いて整理分析した藤野・田中（2006）；ホームステイ先での留学生の言語習得に関して論じた富阪（2006）；ホームステイを留学生に対するソーシャル・サポートとして捉え、ホストファミリーの自由記述による調査結果を分析した原田（2011a）；留学生の「日本語能力向上の認知」に及ぼす影響について質的・量的な分析を加えた原田（2011b）；留学生によるホームステイ評価を分析し、何が留学生にとって有益なサポートであるかを明らかにした原田（2012）；留学生の自由記述を基にホームステイ評価とソーシャルスキル使用について論じた原田（2013a）；ホームステイの際に留学生の日本語力が適応に及ぼす影響を分析した原田（2013b）がある。原田は、上述の5編を原田（2013c）において、第2部「留学とホームステイ」としてまとめ、自身の社会心理学的なアプローチによるホームステイ研究の集大成としている。

短期ホームステイに関する先行研究には、日本語・日本事情教育の一環として実施したホームステイ事例報告である溝口（1995）、短期ホームステイにおける留学生とホストファミリーの双方の学びに着目して学びの特質を明らかにした鈴木（2000）、日本語教育の視点から短期ホームステイの有効性を論じた三間（2003）、NWピーチによる週末型ホームステイ実施上の問題点を論じた岡（2005）、NWピーチによる週末型ホームステイ実施方法の改善を提起した廣田・岡（2008, 2009）が存在する。また、ホームステイの概説書である佐々木・水野（1999）及びアジア学生文化協会（2002）は、短期

ホームステイの受入れ期間中の交流に関しては標準モデルが存在しないことを明らかにしている。

また、このほかに、NWピーチの活動に関して、日韓予備教育学生に対する支援を論じた岡（2007）、ボランティアによる留学生支援の中でNWピーチの活動にも言及した岡（2009）がある。さらに、留学生相談室活動報告の一環としてNWピーチの活動に触れた報告書には、岡・中島（2007）、岡・中島・廣田（2008, 2009）、岡・石田・廣田（2010, 2011, 2012）、岡・石田・中島・廣田（2013, 2014）がある。

2.2 本研究の目的と意義

NWピーチは創設以来13年が経過し、今後の活動のあり方を再検討すべき時期が到来している。2013年度末にはNWピーチ創設者の一人である岡が定年退職に伴い活動現場を離れ、2014年度には岡山大学国際センターがグローバル・パートナーズと改称され、組織の拡充・改編が実施された。これらに伴い、ホームステイ機会を提供する授業「日本事情」の担当教員、及び授業を支援する事務職員の体制にも大幅な変更があった。そこで、NWピーチ13年の活動の歴史を振り返り、ホームステイを中心としたこれまでの活動状況を明らかにし、今後の活動方針をどのように修正すべきかを模索することが本研究の目的である。

ホームステイに関する先行研究は、ホームステイを異文化間コミュニケーションの場として認識し、日本語教育学或いは社会心理学の立場からホームステイが留学生の日本語に与える影響、コミュニケーション・スキルの使用、適応の問題などを取り上げている。他方、ホストファミリーに着目し、留学生に対するソーシャル・サポートに関する分析を行っている先行研究も目につく。しかし、本稿はNWピーチの活動の歴史を振り返ることが目的であり、ホームステイの意義そのものを学問的に論じるものではなく、実践研究としての意味合いが強い。

本研究では、先ず、前節で紹介したNWピーチに関する先行研究、報告書及び連絡会議議事録を基礎資料として、過去13年間に渡るNWピーチの活動の歴史を簡潔に紹介したい。第2に、NWピーチの主たる活動である週末型ホームステイの実施に絞り込み、その活動成果を明らかにしたい³。第3に、ホームステイ参加留学生及びホストファミリーの双方に対して実施しているアンケート調査を基にして、ホームステイ実施上の問題点を整理してみたい。これまで通算して26回企画実施したホームステイにおいては、岡（2005）及び廣田・岡（2008, 2009）で表面化しなかった新たな問題点がここ数年で浮上しており、こうした点の改善が今後の課題として存在する。

このため、参加留学生の範疇、募集形態の見直しといったホームステイ実施方法を再検討する必要に迫られている。最後にこうした点にも言及したい。

3 NWピーチの活動には、これ以外に日韓予備教育学生の里親引き受け及び交流会の実施、中古自転車・日用品の贈与、各種イベントの開催などがある。

3. NWピーチ連絡会議に見る活動の歴史

3.1 NWピーチ連絡会議とは

NWピーチの活動は、NWピーチ連絡会議（通称「ピーチの会」、実質は「NWピーチ理事会」）において企画し、実施される。2014年3月末現在で通算71回の連絡会議を開催している。そこで節目となった連絡会議を取り上げ、NWピーチの活動の歴史を振り返ってみたい。

3.2 創設準備段階（2001年3月21日）

2001年3月21日、筆者の一人である岡と前出の大野氏の呼びかけにより、創設準備会議（＝第1回連絡会議）を岡山国際交流センターロビーにおいて実施した。県内NGO4団体の6人が集まり、留学生支援ネットワーク作りについて話し合った。

正式発足前であったが、第1回ホームステイを企画する方向で調整を重ね、同年7月14日には2回目の創設準備会議を開き、NGO別にホストファミリーの割り振りを行った。7月20日から22日にかけて実施した第1回ホームステイには8人の留學生が参加した。

3.3 NWピーチ正式発足（2001年8月7日）

2001年8月7日、岡山国際交流センター4階交流サロンで開催した3回目の創設準備会議（＝第3回連絡会議）において、NWの名称を「留学生支援ネットワーク・ピーチ」に決定した。この段階で15のNGOからNWへの参加希望があったが、そのうちの9団体はホームステイを主とするNWピーチの活動が当該NGOの活動主旨と合わないとして入会するには至らなかった。このため、NWピーチは次の6団体で発足した。すなわち、アムネスティ岡山、おかやま女性国際交流会、岡山ユネスコ協会、倉敷国際親善協会、ハンド・イン・ハンド岡山、留学生支援ボランティア・WAWA（以下「WAWA」と略称する）である。

年2回の週末型ホームステイの企画実施のほかに、日韓共同理工系学部留學生（学部予備教育生）の里親引き受け、生活用品の斡旋、交流イベントの開催なども視野に入れて活動することに決定した。事務局はハンド・イン・ハンド岡山が担当することになった。

3.4 会則の制定（2003年11月11日）

2003年11月11日、岡山国際交流センター4階交流サロンで開催された第21回連絡会議において会則が制定された。NWピーチは2001年8月7日の正式発足以降2年間会則もないまま活動してきたが、2003年9月9日開催の第19回連絡会議で会則の制定を求める意見が出された。NWピーチは緩やかな組織を目指し、会則もできるだけ簡潔な形のものとするので廣田が草案作りを担当した。

会則によると、NWピーチの目的は、「岡山大学の留學生の支援のために岡山県内のNGOを組織し、岡山大学留學生センターの相談・指導部門と協力して支援活動を行うことを目的とする。」と定められ、事業内容は、第1番目に「ホームステイの企画・実施事業」、第2番目に「留學生との交流を図るための各種行事の実施」、第3番目に「留學生の日常生活支援事業」、第4番目にその他の必要な事

業、と規定された。

連絡会議をそのまま理事会とし、各NGOから2名前後の理事を選出し、会長はWAWAの学生リーダーとすることを申し合わせた⁴。また、会費の規定はなく、連絡会議に参加した社会人メンバーが毎回200円ずつ出し合い、連絡会議の運営費とし、余剰分については、ホームステイの際のWAWA学生スタッフによるJR付き添い交通費等に充当することになった。

3.5 キーパーソンの交替（2007年5月8日）

2007年4月1日、岡山大学留学生センターが国際センターに改組されたことに伴い、留学生相談室体制の強化を目的として廣田に国際センター兼担教員の発令があった。これを契機に、2007年5月8日に岡山国際交流センター6階交流プラザで開催された第39回連絡会議において、連絡会議の司会兼書記及びホームステイのマッチングというNWピーチのキーパーソンの役割を岡から廣田に交代する旨の提案があり、これが了承された。廣田へのキーパーソン交代後のNWピーチは2013年度末まで概ね順調な活動を維持してきたと言えよう。

3.6 入退会

創設時以来長らく6団体で構成されていたNWピーチであるが、2008年3月4日の連絡会議において「アルママータ」⁵、2012年5月8日「浅口市国際交流協会」、2012年9月25日「学芸館高等学校」の入会が承認された。逆に、「おokayama女性国際交流会」から退会の申し出があり、2012年8月7日の連絡会議において承認されたため、2013年度末現在の正式な加盟団体は8団体である⁶。

4. ホームステイ実施状況

4.1 参加留学生数の推移

2001年度から2013年度にかけて年2回ずつ、通算26回の週末型ホームステイを実施してきた。参加者総数は443人で、参加者が最も少なかったのは2008年度前期（第15回）の2人であり、最も多かったのは2012年度後期（第24回）の38人である。1回当たりの平均参加者数は17.0人であるが、毎年前期の参加者が少なく、その平均は10.2人であるのに対して後期の参加者の平均は23.9人である。これは、日本語研修生の中の教員研修留学生、日韓予備教育学生、日研生の入学時期が10月のみであるため、またEPOK学生を含めた交換留学生は10月入学者のほうが4月入学者より多いためである。

4 NGOでは長期に渡って特定の人物が会長の座を占め、組織の融和が保てない事例が散見されるため、こうした事態を回避する目的で学生を会長とすることで申し合わせた。

5 2007年後期のホームステイにおいて、受け入れ家庭の不足が予想されたため、2007年11月にNWピーチのメンバーリングリスト上で「アルママータ」を準会員として承認し、実際の受け入れをお願いしている。

6 これ以外に、2006年度から準加盟団体扱いとなっている「赤磐市国際交流協会」がある。連絡会議には出席できないが、ホストファミリーとして協力したい、との申し出が同協会からあったためである。

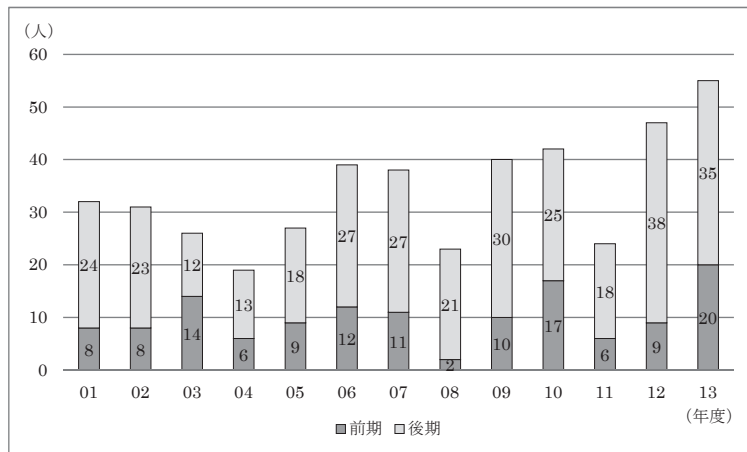


図1 期別・年度別ホームステイ参加者数

4.2 参加留学生の性別と出身国・地域

参加留学生443人の性別は、男性が233人（52.6%）、女性が210人（47.4%）である。

出身国・地域別にみた参加留学生の内訳は表1のとおりである。60か国・地域出身の留学生が参加しており、アジアが207人で全体の46.7%を占める。出身国・地域別では、アメリカが最も多く74人、次いで韓国62人、中国43人、ドイツ及びフランス各23人の順である。アメリカ、ドイツ、フランスが多い理由は、交換留学生の参加者が多いためである。アメリカはEPOK制度による交換留学生⁷、ドイツとフランスは学部間交流協定に基づく交換留学生である。韓国が第2位で62人と多い理由は、日韓共同理工系学部留学生事業で来日する学部予備教育学生がそのうちの42人を占めるためである。

4.3 参加留学生の在籍身分

4.3.1 参加が認められる在籍身分の変遷

まず、ホームステイに参加することが認められる留学生の在籍身分の変遷について触れておきたい。第1章で述べたとおり、ホームステイは当初より「日本事情」科目の課外授業という位置づけであり、ホームステイ参加資格＝「日本事情」科目履修資格であった。

2001年当時、留学生センターに所属する留学生は「日本語研修生」と「日韓予備教育学生」であった。これに「日研生」を加えた3つの在籍身分を持つ者が「日本事情」履修者であり、これらの留学生を対象としてホームステイを開始した。

2005年度には、大使館推薦国費留学生である日本語研修生の減少傾向を踏まえて、EPOK制度に基づく交換留学生及び学部間交流協定で来校する交換留学生の参加資格を認めることにした。

2006年度には、国費及び私費の研究生で日本語集中コースを履修する者に限定して参加資格を認めたと⁸、両者ともに「日本事情」科目の出席状況が悪く、私費の研究生は2008年度末を以て、国費の

7 EPOKはEnglish Program Okayama（岡山大学短期留学プログラム）の略称であり、大学間交流協定に基づく交換留学制度である。

8 日本語研修コースの未修者クラスが「初級集中クラス」の名称で研究生に開放されたことに伴い、研究生が

研究生は2010年度末を以て履修資格を取り消した。

2008年度には、O-NECUS制度に基づく大学院レベルの留学生で日本語集中コースを履修する者に参加資格を認めたが、やはり「日本事情」科目の出席状況が悪く、2009年度末を以て履修資格を取り消した。⁹

2012年度前期には、「日本事情」を履修したCAMPUSアジアプロジェクトの学生1名にホームステイ参加を認めたが¹⁰、当該学生はホームステイを希望しなかった。また、同年度後期から同プロジェ

表1 ホームステイ参加者の出身国・地域（2001年度～2013年度）

アジア（16か国・地域）	207人	北米（2か国）	75人
インド	6	アメリカ	74
インドネシア	17	カナダ	1
韓国	62	中南米（13か国）	25人
カンボジア	2	アルゼンチン	1
タイ	21	エルサルバドル	2
台湾	2	コスタリカ	2
中国	43	ジャマイカ	1
パキスタン	2	チリ	1
バングラデシュ	7	ハイチ	1
フィリピン	16	パナマ	1
ブータン	1	パラグアイ	2
ベトナム	1	ブラジル	6
マレーシア	5	ベネズエラ	1
ミャンマー	19	ペルー	3
モンゴル	1	ボリビア	1
ラオス	2	メキシコ	3
オセアニア（2か国）	14	欧州（12か国）	82人
オーストラリア	12	イギリス	15
パプアニューギニア	2	オーストリア	1
中近東（6か国）	14	スペイン	2
アフガニスタン	2	セルビア	9
イエメン	1	ドイツ	23
オマーン	1	フィンランド	1
クウェート	1	フランス	23
トルコ	8	ペラルーシ	1
ヨルダン	1	ポーランド	3
アフリカ（9か国）	26	リトアニア	1
エジプト	7	ルクセンブルグ	1
ガーナ	5	ロシア	2
ケニア	7	合計（60か国・地域）	443人
ジンバブエ	1		
スーダン	2		
タンザニア	1		
チュニジア	1		
マダガスカル	1		
モーリタニア	1		

日本語研修コース科目の一つであった「日本事情」を履修することが可能になった。

9 O-NECUSはOkayama University - North East China Universities platform, Graduate Student Exchange Program（岡山大学 - 中国東北部大学院留学生交流プログラム）の略称であり、ダブルディグリー制度と短期留学制度から成る大学院レベルの交流協定である。O-NECUS学生の出席率の問題については岡（2010：4-8）を参照願いたい。

10 CAMPUSはCollective Action for Mobility Program of University Studentsの略称であり、いわゆるCAMPUSアジアプロジェクトは文部科学省の補助金採択事業であり、日中韓の3大学による学生の相互交流事業を展開している。

クトと「日本事情」科目の一部について合同実施を始めたことにより、同プロジェクトの留学生にもホームステイ参加資格を認めた。

4.3.2 在籍身分別に見た参加留学生の内訳

2001年度からの通算で見ると、「日本語研修生」が158人（35.7%）で最も多く、次いで「EPOK学生」が122人（27.5%）と多く、「その他の交換留学生」66人（14.9%）、「日韓予備教育学生」42人（9.5%）、「日研生」25人（5.6%）、「CAMPUSアジア学生」13人（2.9%）、「O-NECUS学生」11人（2.5%）、「その他」6人（1.4%）である。

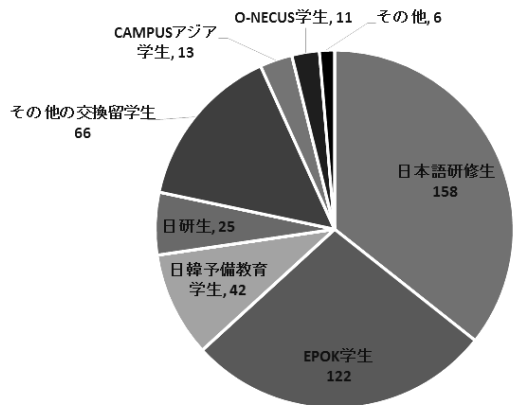


図2 ホームステイ参加留学生の在籍身分別人数

しかし、交換留学生の参加が認められるようになった2005年度以降で見ると、参加者335人中「EPOK学生」が最も多く36.4%を占め、「その他の交換留学生」を合わせた交換留学生が全体の56.1%を占める。交換留学生、とりわけ「EPOK学生」の参加者増加は、「日本事情」科目が従来の「日本語研修生」中心の日本語研修コース科目から2011年度にはEPOK科目へと変更された理由を説明するものである。

4.4 受入れ団体別に見たホームステイ参加留学生数

2001年のNWピーチ発足時には加盟NGOが6団体であったが、そのうちの1団体が退会し、新たに3団体が加わり、2013年度末現在でNWピーチが8団体及び準加盟団体1団体が構成されていることはすでに述べたとおりである。

ホームステイ参加留学生443人を受入れ団体別に見ると、「倉敷国際親善協会」が187人（42.2%）

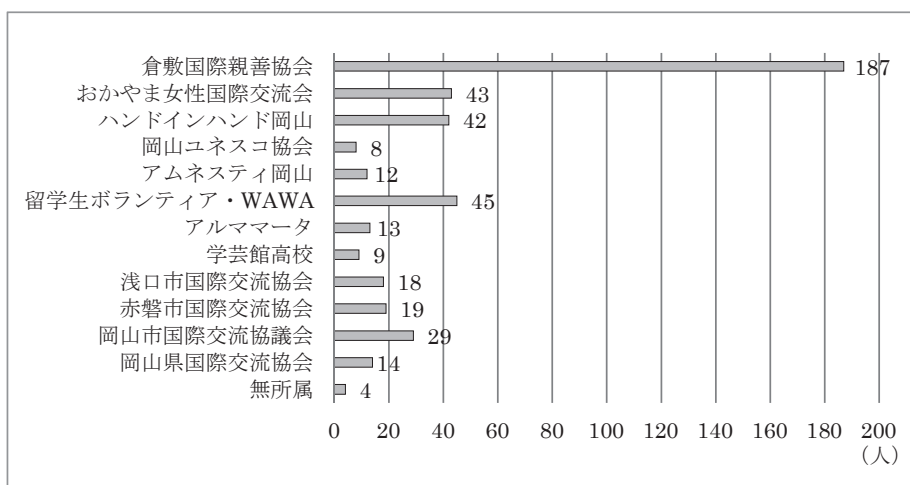


図3 受入れ団体別ホームステイ参加留学生数

と群を抜いて多い。次いで、「WAWA」45人（10.2%）、「おかやま女性国際交流会」43人（9.7%）、「ハンド・イン・ハンド岡山」42人（9.5%）、「浅口市国際交流協会」18人（4.1%）、「アルママータ」13人（2.9%）、「アムネスティ岡山」12人（2.7%）、「学芸館高等学校」9人（2.0%）、「おかやまユネスコ協会」8人（1.8%）である。参加者数が多い後期にあつては、加盟団体だけではホストファミリーが確保できず、その都度必要に応じて外部の団体等へ協力を依頼した。その結果は、「岡山市国際交流協議会」29人（6.5%）、「岡山県国際交流協会」14人（3.2%）、「無所属」4人（0.9%）である。

4.5 第16回までのホームステイの問題点と改善策

第16回まで実施されたホームステイについては、岡（2005）、廣田・岡（2009）において、ステイ・ビジット後に実施される留学生、ホストファミリー双方へのアンケート調査の結果を分析し、具体的な問題点に考察を加え、改善策を図ってきた。

2009年の調査ではじめて満足度の項目に「あまり楽しくなかった」と否定的な回答をした学生が存在した。原因の1つとして、学生の食物アレルギーについての情報が十分ホストに伝わっていなかったという問題が明らかになった。食物アレルギーやペットについてはあらかじめ作成される留学生リストにその情報が掲載され、連絡会議に参加する加盟団体の担当者に配布される。しかし、担当者からホストを希望する各団体のメンバーへの依頼は電話など口頭で伝えられることも多く、食事やペットについての情報が抜け落ちる可能性が考えられた。2010年以降は、決定したホストファミリーにメール等で学生の連絡先を知らせる際、念のため当該学生について配慮する点も伝え、徹底を図るようにしている。

2009年のアンケート調査においては4%（5人）の学生について「好感がもてるとも、もてないともいえない」としたホストが存在し、その原因の1つとして、学生からの働きかけがないなど、留学生側の積極性の無さが問題とされた。そこで、2009年後期の実施から、それまでも問題点とされてきた留学生の健康状態、お土産、お礼について指示を与えとともに、積極的にホームステイに参加するようアドバイスを加えた「Tips for a Successful Homestay」という簡単なガイドラインをA4用紙1枚に印刷して留学生に配布することとした。

実施日の設定について、2009年までは2週間の連続した週末のどちらかという候補しかなかった。そのため、無理やり予定をいれた留学生が実施日当日に予定の変更を申し出てホストファミリーを慌てさせるというケースが複数生じていた。これに対応して、2010年から候補の週末を連続した3週間とし、多少ではあるが選択の幅を広げることを行った。また、迅速にマッチングを行っていくためにホストファミリーから日程を含む受入れ条件を提示してもらい、それに合わせて参加留学生を募るという方法が廣田・岡（2009）において提案された。これについては2010年より、試案として、新たにホストファミリー向けに受入れ希望期間などを記入できる「ホスト・ファミリー情報」用紙を作成してみたが、従来の「ホスト・ファミリー登録申込書」と重複する部分も多く、また毎回のホームステイのためにホストに用紙の記入を依頼することは混乱をきたすことが予想され、これは試案のままで終わった。しかし、「ホスト・ファミリー情報」を作成したことで「登録申し込み書」に「食事への対応」や「ペットの有無」等の必要な情報が欠けていたことが改めて認識され、「ホスト・ファミリー情報」

の内容を「登録申込書」に盛り込むかたちで、2012年に「ホスト・ファミリー登録申込書」の改定を行った。

ホストファミリーへのオリエンテーションを行っていないことから、ホストファミリー間での情報共有や複数のファミリーが連携した受入れが自発的に生じていること、こうした取り組みを後押ししていくことの必要性が廣田・岡(2009)で指摘されている。その仕組みづくりまでには至っていないが、2008年より8月の連絡会議後に「夏のお食事交流会」と称して懇親会を定期的に催すようになった。こうした積み重ねにより、加盟団体、大学の垣根を越えて、メンバー間での交流、協力体制が強まっていると感じられる。

これらの改善策が功を奏しているのか、また、学内の留学生教育を取り巻く環境が大きく変わろうとしているなかでホームステイプログラムに生じている新たな問題点はなにか、本論の後半では2009年の第17回以降5年間に実施されたホームステイに参加した留学生、ホストファミリー双方へのアンケート結果を基に分析をすすめていく。

参 考 文 献

- 有川友子(2000)「21世紀に求められる日本人と留学生との交流のあり方ー“留学生と地域交流”という視点を超えてー」『留学交流』第12巻第5号, pp.2-5.
- 有田佳代子(2005)「地域の‘国際化’と大学の貢献:留学生交流を中心として」『敬和学園大学研究紀要』第14号, pp.181-197.
- バージン ルース(2007)「“Global Citizens”を養成するための大学の環境整備」『留学交流』第19巻第6号, pp.18-21.
- 藤野瑠弥・田中共子(2006)「ホームステイ場面におけるソーシャルスキルー在日留学生と日本人ホストファミリーの視点からー」『留学生教育』第11号, pp.101-110.
- 古城紀雄(2002)「みずからの国際化を標榜してこそー外国人留学生をリソースとした交流を考えるー」『留学交流』第14巻第12号, pp.6-9.
- 花見楨子(2006)「地域交流における留学生支援と国際化」『留学交流』第18巻第6号, pp.2-5.
- 原田登美(2011a)「日本で学ぶ留学生のためのホストファミリーによるソーシャル・サポートーホスト意識調査の自由記述の分析ー」『言語と文化』(甲南大学国際言語文化センター紀要)第15号, pp.155-178.
- 原田登美(2011b)「ソーシャル・サポートから見たホームステイと日本語習得ーサポートが“日本語能力向上の認知”に及ぼす影響」『留学生教育』第16号, pp.25-36.
- 原田登美(2012)「ソーシャル・サポートにおけるホームステイの有益なサポートと有益でないサポートー留学生から見たホームステイ評価ー」『言語と文化』(甲南大学国際言語文化センター紀要)第16号, pp.155-188.
- 原田登美(2013a)「留学生の自由記述によるホームステイ評価とソーシャル・スキルの使用」『異文化接触のダイバーシティ』甲南大学総合研究叢書第115号, pp.33-60.
- 原田登美(2013b)「言語能力のレベル差と異文化社会適応への影響ーホームステイをした留学生の日本語力は適応にどう関わるかー」『言語と文化』第17号, pp.241-268.
- 原田登美(2013c)『留学生の動機とホームステイ』ふくろう出版
- 廣田陽子・岡益巳(2008)「地域社会における留学生交流支援のあり方ー留学生支援ネットワーク・ピーチの交流支援活動を事例としてー」『留学生交流・指導研究』Vol.10, pp.135-147.
- 廣田陽子・岡益巳(2009)「週末型ホームステイ実施方法の改善に向けて」『岡山大学経済学会雑誌』第41巻第3号, pp.1-17.
- 牧野成一(1996)「ホームステイにおける日本語学習効果」鎌田修・山内博之(編)『日本語教育・異文化間コミュニケーションー教室・ホームステイ・地域を結ぶものー』(財)北海道国際交流センター, pp.41-59.
- 松元宏行(2005)「留学生と地域社会との交流ー群馬大学の場合」『留学交流』第17巻第6号, pp.6-9.

- 三間美奈子（2003）「日本語教育におけるホームステイの有効性－長野市の事例をからめて－」『信大日本語教育研究』第3号，pp.33-45.
- 溝口博幸（1995）「インターアクション体験を通じた日本語・日本事情教育－“日本人家庭訪問”の場合－」『日本語教育』第87号，pp.114-125.
- <http://soar-ir.shinshu-u.ac.jp/dspace/bitstream/10091/3009/1/Nihongo03-03.pdf>（2009年8月28日閲覧）
- 中山謙二（2004）「地域社会における留学交流のあり方」『金沢大学留学生センター留学交流』第10号，pp.2-5.
- 岡益巳（2005）「週末型ホームステイの実施とその問題点」『広島大学留学生教育』第9号，pp.37-53.
- 岡益巳（2007）「日韓共同理工工学部留学生の予備教育期間における留学生相談室の支援活動」『大学教育研究紀要』第3号，pp.1-14.
- 岡益巳（2009）「留学生30万人計画を視野に入れた留学生支援ボランティア活動」『大学教育研究紀要』第5号，pp.13-31.
- 岡益巳（2010）「異文化体験・交流を目的とした日本事情科目の諸問題」『広島大学留学生教育』第14号，pp.1-12.
- 岡益巳・石田聡子・廣田陽子（2010）『2009年度留学生相談室活動報告書』岡山大学国際センター留学生相談室，42頁
- 岡益巳・石田聡子・廣田陽子（2011）『2010年度留学生相談室活動報告書』岡山大学国際センター留学生相談室，69頁
- 岡益巳・石田聡子・廣田陽子（2012）『2011年度留学生相談室活動報告書』岡山大学国際センター留学生相談室，69頁
- 岡益巳・石田聡子・中島嘉子・廣田陽子（2013）『2012年度留学生相談室活動報告書』岡山大学国際センター留学生相談室，73頁
- 岡益巳・石田聡子・中島嘉子・廣田陽子（2014）『2013年度留学生相談室活動報告書』岡山大学国際センター留学生相談室，48頁
- 岡益巳・中島美奈子（2007）『2006年度留学生相談室活動報告書－学内外の留学生支援リソースを活用した支援体制の構築を目指して－』岡山大学国際センター留学生相談室，40頁
- 岡益巳・中島美奈子・廣田陽子（2008）『2007年度留学生相談室活動報告書』岡山大学国際センター留学生相談室，36頁
- 岡益巳・中島美奈子・廣田陽子（2009）『2008年度留学生相談室活動報告書』岡山大学国際センター留学生相談室，44頁
- 大西晶子（2008）「市民参加の交流活動の分析視点についての一考察」『留学生交流・指導研究』Vol.10，pp.85-93.
- 佐々木ひとみ・木村周（1996）「留学生とホストファミリーが認知するホームステイにおける適応課題－米国短期留学生を対象として－」『教育相談研究』第34号，pp.31-43.
- 佐々木ひとみ・水野治（1999）『ホームステイハンドブック－ホストファミリーと運営担当者のために－』JAFSAブックレット①，アルク
- 佐々木陽子（1997）「留学生の交流活動を考える－周辺の課題から中心的課題への転換－」『留学交流』第9巻第12号，pp.2-5.
- 佐藤由利子（2012）「留学生受入れによる地域活性化の取組みと課題」『留学交流』（ウェブマガジン）2012年6月号，Vol.15，pp.1-9.
- 佐藤由利子・橋本博子（2011）「留学生受入れによる地域活性化－自治体と大学の協働による取組みの横断的分析－」『比較教育学研究』第43号，pp.131-153.
- 鹿浦佳子（2007）「ホームステイにおける日本語学習の効用－ホームステイ，留学生，日本語教員の視点から－」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第17号，pp.61-112.
- 鹿浦佳子（2008）「ホームステイする学生は成績がいい！ホームステイをすると成績が上がる？」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第18号，pp.99-134.
- 鹿浦佳子・武田千恵子（2000）「ホームステイの功罪とホームステイプログラムへの提言」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第10号，pp.33-50.
- 栖原暁（1999）「民間団体による留学生支援と大学教育」『異文化間教育』第13号，pp.19-35.
- 鈴木潤吉（2000）「地域の国際交流での学びとは？－赤井川村での留学生ホームステイにおけるホストと留学生の反応から」『北海道教育大学紀要』第10号，pp.33-50.
- <http://ci.nii.ac.jp/naid/110000212756/en>（2009年8月28日閲覧）
- 手塚千鶴子（1991）「ホームステイと異文化間コミュニケーション－日本人ホストファミリーからみた留学生の場合」『異文化間教育』第5号，pp.135-144.
- 富阪容子（2006）「ホームステイ先における言語習得－甲南大学夏期日本語集中講座の場合－」『言語と文化』（甲南大学国際言語文化センター紀要）第10号，pp.219-232.
- 内田純一（1994）「国際化は地域に何をもちたらしめているか：東京多摩地域の社会教育・市民運動の事例を手掛かりに」『異文化接触と日本人』横田・堀江（編），現代のエスプリ322，至文堂

山本直美 (1994)「日本人ホストファミリーにみる異文化間コミュニケーションの構造－コンテキスト志向から言語志向へ－」『お茶の水女子大学人文科学紀要』第47号, pp.159-177.

山本直美 (1996)「ホームステイにおける異文化間コミュニケーション－日本人ホストマザーの対人意識の分析から－」『日本語教育・異文化間コミュニケーション－教室・ホームステイ・地域を結ぶもの－』鎌田修・山内博之(編), (財)北海道国際交流センター, pp.149-173.

横田雅弘 (1995)「大学・自治体・市民の協力による国際交流ネットワークの構築－国立市における実践から－」『留学交流』第7巻第8号, pp.7-9.

横田 (1999)「地域とよい協力関係を結ぶために－大学が地域と交流することの意味を問うことから－」『留学交流』第11巻第2号, pp.2-5.

【資料1】

実施年・期別, 在籍身分別 (2001～2013年度)

(人)

身分/年(回)	01 前 (1)	01 後 (2)	02 前 (3)	02 後 (4)	03 前 (5)	03 後 (6)	04 前 (7)	04 後 (8)	05 前 (9)	05 後 (10)	06 前 (11)	06 後 (12)	07 前 (13)	07 後 (14)	08 前 (15)	08 後 (16)	09 前 (17)	09 後 (18)	10 前 (19)	10 後 (20)	11 前 (21)	11 後 (22)	12 前 (23)	12 後 (24)	13 前 (25)	13 後 (26)	合 計
日本語研修生	8	17	7	17	14	5	6	8	7	3	5	5	6	13	0	5	4	4	6	2	1	0	3	6	2	4	158
日韓予備学生	0	5	0	5	0	4	0	4	0	2	0	6	0	1	0	1	0	1	0	3	0	4	0	2	0	4	42
日研究生	0	2	1	1	0	3	0	1	0	2	0	1	0	2	0	2	0	1	0	1	1	1	0	5	0	1	25
EPOK学生	-	-	-	-	-	-	-	-	2	7	4	12	5	7	0	11	6	5	6	10	4	5	4	15	8	11	122
学部間交換生	-	-	-	-	-	-	-	-	0	4	0	3	0	4	2	2	0	6	4	9	0	8	2	10	2	10	66
O-NECUS生	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	11
CA学生	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	8	5	13
その他	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	3	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	6
合 計	8	24	8	23	14	12	6	13	9	18	12	27	11	27	2	21	10	30	17	25	6	18	9	38	20	35	443

【資料2】

年・期別，受入れ団体別留学生人数（2001～2013年度）

（人）

団体名/ 年度(回)	01 前 (1)	01 後 (2)	02 前 (3)	02 後 (4)	03 前 (5)	03 後 (6)	04 前 (7)	04 後 (8)	05 前 (9)	05 後 (10)	06 前 (11)	06 後 (12)	07 前 (13)	07 後 (14)	08 前 (15)	08 後 (16)	09 前 (17)	09 後 (18)	10 前 (19)	10 後 (20)	11 前 (21)	11 後 (22)	12 前 (23)	12 後 (24)	13 前 (25)	13 後 (26)	合 計	
倉敷国際 親善協会	4	10	6	15	10	6	2	7	6	8	5	8	5	9	0	10	4	16	6	12	2	11	1	9	6	9	187	
おかやま女性 国際交流会	0	2	1	3	2	3	2	4	1	4	1	5	2	3	0	1	1	2	2	2	1	1	0	0	0	0	43	
ハンドイン ハンド岡山	2	0	0	2	0	2	0	0	1	2	1	2	0	4	2	3	0	3	4	4	2	2	1	3	1	1	42	
岡山 ユネスコ協会	0	0	1	1	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	8	
アムネステイ 岡山	1	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	2	1	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	12	
留学生ボランティア WAWA	1	2	0	1	0	1	1	2	1	2	1	4	2	2	0	1	3	2	2	2	1	1	1	4	2	6	45	
岡山市国際 交流協議会	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	5	0	3	0	5	0	5	29	
岡山県国際 交流協議会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	3	6	14	
アルママータ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	1	3	1	13
赤磐市	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	6	1	5	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	19
浅口市	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	5	5	2	18	
学芸館高校	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	0	3	9	
無所属	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
合 計	8	24	8	23	14	12	6	13	9	18	12	27	11	27	2	21	10	30	17	25	6	18	9	38	20	35	443	

Looking Back on the History of International Student Support Network Peach (The First Half)

– For Further Improvements of the Short-term Homestay Programme –

Yoko Hirota, Masumi Oka

Abstract

International Student Support Network Peach (NW Peach) was established by six NGOs and Oka of the international student advising room in Okayama university in response to requests from international students who wanted to have homestay experience with Japanese family. Since then NW Peach has engaged in support services to international students in Okayama university. The purpose of this paper is to review the history of NW Peach and give a clear overview of its activities in search for future development.

The major activity of NW Peach is providing short-term homestays and 443 students participated the programme between 2001 and 2013. More than thirteen years have passed since its establishment and the circumstances surrounding the NW Peach and international student advising room in the university have been changing. Three new groups joined the network in 2008 and 2012 and one left in 2012. The “internationalisation” has become a keyword in many universities in Japan including Okayama university and it is increasingly growing in importance. Thus the number of international students who participate the programme is increasing yearly and their cultural and academic backgrounds become more widely varied. The homestay programme was reviewed twice in 2005 and 2009 and several improvement plans explored in the second review have been implemented.